

翻訳：『15世紀の書物 — 写字生、印刷家、装飾家』(その2)

カート・F・ビューラー (著)

向井 毅・柴倉水幸・野上良子・神山絵美 (共訳)*

第2章 印刷家について

大英博物館所蔵のある書物にボッカチオの散文ロマンス『イル・フィロコーロ』が収められており、巻末には次のようなラテン語の覚書が添えられている。「マインツの親方ヨハン・ペトリがフィレンツェでこの作品を書いた。」この覚書には、本講義が扱う15世紀の1472年11月12日に符号する、グレゴリオ暦の日付がついている。同じ大英博物館所蔵の姉妹編となるもう1冊にはペトラルカの『勝利』が収められ、よく似た奥書が添えられている。翻訳すると次のようになる。「マインツの親方ハンス・ペトリが2月22日にこの作品を書いた。」年代は忘れられていたようで、省かれている。周知のように、多くの写本は15世紀前半に書かれたものでも、折丁記号、フォリオ番号、つまりページ数、つなぎ語、欄外見出しをはじめとする、その他の工夫が見られるが、今触れたばかりのボッカチオやペトラルカにはこのような工夫が講じられていない。このことがなぜそんなにも重要なのかと疑問に思われるかもしれないが、もっともなことである。幾百もの写本には、書き写した写

* 向井 毅 (福岡女子大学文学部英文学科)、柴倉水幸 (元福岡女子大学非常勤講師)、野上良子 (西南学院大学非常勤講師)、神山絵美 (福岡女子大学大学院文学研究科博士前期課程修了)。本稿は Curt F. Bühler (著) *The Fifteenth Century Book: the Scribes, the Printers, the Decorators* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1960) 訳出の一環として、第2章「印刷家」(pp. 40-65) の翻訳を試みるものである。

字生の署名と日付が入れられている。しかし15世紀後半に書かれたはるかに多くの写本は、上に述べたような、紙葉を容易に折って綴じるためやテキストの特定の箇所をたやすく探しあてるための便利な工夫を備えていなかった。ここで重要なのは、これらの書物が写本ではなく、疑いもなく刊本であることだ。このことはすでに最初の講義で示した、15世紀そのものが手書き本と印刷本の区別をほとんど行っていない、という事実を繰り返し強調することになる。確かに15世紀においては「手で書かれたもの」と区別するために、初期刊本は「ペンを使わずに書かれ、作られた冊子体」という奇妙な用語で呼ばれたり、「印刷された文字で書かれた」書物と呼ばれたりしていた。フランチェスコ・フィレルフォは1470年7月25日の手紙で、彼の言葉を借用すれば「正確な仕事をする熟練した写字生の仕事とおぼし」き、活字を用いたこのような新しい本を、手に入れたことに対する彼の関心の程を記している。この講義も後になれば明らかとなるが、時には、あるいは絶えず写字生の伝統や習慣、手法に目を向けられない限り、初期の印刷本の研究を行うことはできないのである。

印刷術の発明は満を持してなされた。写本生産のための紙の使用は、15世紀前半にますます頻繁になっていった。また、印刷所が稼動しはじめたとき、多量の紙が入手可能であったということにも、注目すべきである。製紙工場の増加は、バーゼル公会議（1431-1449）の重要な経済効果であったからだ。これにより一般読者は、書物生産にあたり、その供給源が自然の女神の気まぐれに振り回されず、羊皮紙よりも価格が安い材料（つまり紙のこと）に慣れていった。紙の生産は大幅に増やすことは可能であった（子牛の生産はそうはいかなかった）。1450年から数十年のうちに見た製紙工場の規模と数の増大は、驚異的であったにちがいない。一方、紙の本は貸付の抵当とはみなされないと規定した、ケンブリッジで公布された1480年の裁定は、紙の本は「安っぽくて劣等」とみなされたことを暗示している。しかし、羊皮紙本は引き続き受け入れられ、そのような目的として、もっとも一般的な抵当であった。羊皮紙本に関していえば、供給者は突然増加した生皮への需要に実際どのように応じたのであろうか。1450年以前に羊皮紙が不足したときでも、引き続き変わらず書物に対する需要があったことを考えれば、写字生が必要とした羊皮紙の量は、長年にわたり見当がつけられていて、きわめて一定のきまった量であったと思われる。それだけに「羊皮紙生産者」が、まったく突

然に思いもかけず、予想もしなかった印刷所から、何百という羊皮紙の注文に直面したことは明らかである。ゲーテンベルクの『42行聖書』の場合、1冊の本は170頭分の子牛の皮を必要としたと推定されている。従って「羊皮紙を使って」生産されたと信じられている30数冊は、約335グルデンものお金を費やし、5千頭分の子牛の皮を使い切った計算となる。時をおかず、1457年と1459年版の詩篇歌集、『ミサ典書』、ドゥランドゥスの著書『典礼大全』、クレメンス5世の『教会憲章』、『カトリコン』（いずれもすべて大部な本）が数十冊ずつ、これらに加え1461年以前に羊皮紙を使ったその他の小さな出版物が印刷された。そのため、さらに何千頭もの子牛の皮が必要とされたことになる。これらすべての羊皮紙は必要とされたというだけでなく、問題なく印刷家に供給されたことは明らかである。印刷所が関与しない従来通りの需要に加えて、この新しい羊皮紙の注文に十分応えられたことは、心にとめておくべきであろう。この膨大な量の羊皮紙がどこから来たのかということは、われわれの関心事ではない。それは経済史の問題である。しかしそれは、あることに思いをめぐらせる。1450年代の大陸の肉屋には、子牛の腿肉や薄切り肉、頭肉の「特売品」が並び続けたはずなのだ。

印刷技術の急速な発展と広がりをもつ一つの要因に、当時の文明化したヨーロッパ全域で観察できる、ある程度の読み書き能力が広まった事実がある。15世紀における一般大衆の識字率は、長年意見の分かれる問題であった。しかも正確な見積もり、つまり信頼に足る予測を引き出すのに十分な証拠は、にわかには現れそうにない。しかし手元にある証拠から、15世紀において読み書きができる大衆の割合は、通常想定されるものよりもはるかに高いことが引き出せそうである。13世紀以来、平信徒は書くことができたし、商人も当然ながら書くことができなければならなかった。イングランドでは、パストン家、ストーナー家、プランプトン家、セリーズ家の人々とその友人たちが容易に読み書きのできたことは確かであり、同じことが大陸のフッガー家、メディチ家、クール家にも言えるにちがいない。公の場に貼られ、一般の興味を引く事柄を書き記したポスターの存在はよく知られている。われわれの手元には、教育を受けていない人によって書かれた実例があり、教育を受けていないということが、読み書き能力のなさを意味しない、という点を心にとめておかねばならない。イングランドでは1489年に、「聖職者特権」を管理する決まりが変更された。それは明らかに、読み書きのでき

る一般大衆が大きく拡大したため、聖職者がこの「特権」を過度に利用することになったからであり、その結果「基本的な決まり」を変える必要があったのである。もしサー・トマス・モアの1523年の見解を採用したとすれば、15世紀のイングランドの半数の人々が読むことができた結論づけざるをえない。現代の立派な学者によって考えられた見解は次のようなものである。「15世紀には単純労働者より上の社会的地位にある人なら誰しも、完全に文盲とはいえなかったようだ。すべての人は手紙を書くことができたし、大抵の人は自分のことを書きことばで容易にそして流暢に表現することができた」。そこでさしあたってはヨハン・ゲンスフライシュが実際には印刷技術の発明者だと想定しながらも（現在ではゲンスフライシュとグーテンベルクとは同一人物であることが判明している）、グーテンベルクがこの技術の発明をおこなったとして、その当時すでに十分な読者層と本を機械的に生産するのに手頃な道具が手元にあったことは間違いない。

印刷術がいったん確立すると、今度は写字生の組合に対する影響という問題が生じた。明らかなことであるが、手書きの本、続いて手書きの文書も印刷術との戦いに敗れ、舞台から姿を消すことになった。しかし15世紀においては、写字生にも印刷家にも十分にまだ居場所が残っていたことはこれまでも強調されてきた。その当時写本は個人の委託により作られ続け、注文をした唯一の人を満足させればこと足りた。その一方で印刷は公的な事業であり、その成功は広く多様な顧客層により製品が受容されるか否かにかかっていた。すでに見てきたように、誰もが自分自身の写字生になることはできても、自分自身の印刷家にはなれなかったのである。

写字生と印刷家との関係は、もちろん場所によりさまざまである。しかし一般的な言い方が許されるならば、写字生は総じてすぐには印刷術という新しい技術と互角の戦いを始める必要はなかった。予想されることであったが、都市によっては印刷業への強い反発があった。ジェノヴァでは1472年5月11日、写字生が印刷家の登場に反対して市会に訴えた。特に、印刷家がさまざまな祈祷書や学校教科書を出版できないようになる、という効果を期待したのであった。これらの書物を求める既成市場はいたるところにあり、それゆえ写字生が先買権を確保したいと願う書物の部類であった。ギュンター・ツァイナーとヨハン・シュスラーに対するアウクスブルクの仕立屋、絵入書を作る職人、および地図製作者の苦情は、初期の活版印刷術を学ぶす

べての者にとってきつと馴染みのあることであろう。パリでは1533年になってもなお、ソルボンヌが印刷業の全面禁止を要求した。確かにこれは翌年国王フランソワ1世によって聞き入れられたが、幸運なことにこの布告は国会で承認されなかったために、決して効力を持つことはなかった。

一方、ナポリやボローニャの写字生は、この緒についたばかりの産業を進んで手伝い、またそれを切望していたようにも思われる。小規模の町で、書物の需要が比較的小さなハーゲナウやブラオボイレンでは、写字生と印刷家は、われわれの知る限り、平和に協調しあって暮らしていた。15世紀末、繁栄していたハンザ同盟都市リューベックにおいて、シュテフェン・アルンデスは裁判所書記官をしながら印刷家であることができた。ヤーコブ・ケーベルは16世紀初め、オッペンハイム・アム・ラインにおいて、印刷家と市当局書記官の仕事を果たすことに全く困難はなかった。一方、能筆家のヨハネス・ブルーネは、1493年から1510年までエルフルトに「まだら模様のライオン」という看板を掲げて仕事場を定めた。この期間の数年、そこでは印刷所も稼動していたようである。

印刷業務の多くの部分が写字生の仕事に対応したので、早晚これら2者間の協働が不可避になるのも驚くべきことではなかった。実際、このことは印刷された『ミサ典書』にうかがうことができる。これは1458年頃、明らかに写本に挿入するというはっきりとした目的をもって、ヨハン・フストとペーター・シェーファーによって作られたものである。写字生たちが、自分たちの仕事を単純化するためにときどき印刷されたテキストを使ったという事実から、暦の部分だけが印刷された紙葉で構成されている交唱聖歌集ランベス写本7のつくりがうまく説明できる。逆に同時代の手書きの紙葉をはさみこんでいる初期刊本の例も多くある。おそらく、手持ちの書物を完成させるには印刷枚数が足りないということがわかったとき、印刷家は不足の枚数分をもう一度印刷するか、あるいはわずかな枚数が必要な場合、写字生にテキストを書かせるかのいずれかの選択を迫られた。従って後者の場合、結果として手書きのページは印刷されたものと一緒に綴じられることになった。未製本のまま製本屋に届けられた時点で、印刷ページの不足が判明した場合、印刷家はその書物を完成させるために写字生の援助を求めざるをえなかった。

手書き本の伝統は、多くの場合、印刷工に詳細に引き継がれた。私は、最近の研究において、ボローニャで印刷された法律書の形態が、ペチア方式用

に規定された大学の規則といかに密接に対応しているかを示した。もっとも印刷業界は同じ規則に縛られてはいなかった。印刷本生産に関する問題は、印刷家がレイアウトの原則、つまり、本の各行各ページに印刷された文字をどのように配列するかという規則を採用してからは、非常に少なくなっていく。その規則はそれまで長い間、能筆家たちに広く用いられてきた慣行であった。印刷家の仕事のこの側面を監督するため能筆家が雇われたということは、十分考えられることである。とにかく、印刷家が写字生から引き継いだひな型に倣ったことは自然なことであった。ことに、多くの写字生が結局は印刷家となったというにとどまらず、時折は印刷業界の手助けもしていたことだし、その際彼らの特別な才能が必要とされたからである。自明なことであるが、印刷家が自分の活字のデザインをするときは、能筆家だけしか頼りにできなかったであろう。従って、能筆家の筆跡の研究が初期の活字を専門的に研究するには非常に重要である。代わって能筆家も印刷活字を、特にニコラス・ジャンソン (c.1420-80フランスの印刷業者・活字彫刻者・ローマン体を完成) のものを真似していたともいわれてきた。ジャンソンの活字はイタリア中で好意的に迎えられたといわれており、写字生たちは競うように、可能な限りジャンソンの活字を真似していたと考えられる。しかし、書の歴史を研究する一派からは、そのようなことはかつて起こったことはない、と強く否定されてきている。結局のところ、印刷業界は広範にわたり、写字生の訓練や活用のための書の手引書を出版することで、能筆家の功績に報いていたのである。

それほどよく知られていないかもしれないが、印刷家に引き継がれた写字生の慣行のもう一つ別の例を挙げるとすれば、手書き原稿が「ゆっくりと時間をかけて異種のテキストの集積体となる」傾向が思い浮かぶ。これは白紙のページが手元にあると、写字生はその白紙のページを、ほかの箇所との関係の有無にかかわらず、雑多な短い文章で埋めようとしたことの結果である。ウィリアム・キャクストンは好んでこの慣行を採用したため、彼の『知恵の宮廷』の最後には、散文体の雑多な文章（たとえば、モーゼの十戒に関するもの、美德や悪徳の一覧表など）が多々見受けられ、それらは40枚のうち36枚を占める著者不明の詩作品と明白な関係はない。リドゲイトの『馬と羊とがちょう』のキャクストン版末尾に白紙が5ページ続いたため、キャクストンはそのうちの4ページを用いて、ウィリアム・ブレイズが「様々な実

詞と動詞の正しい使い方」と説明した雑多な知識を集めて印刷することに決めた。そのような例は挙げようと思えばいくらでも挙げることができる。

写字生もまた印刷家のために編集者として活躍した。ナポリのマシアス・モラヴスのためにこの才能を生かしたパルマの「皮肉屋」ジョバン・マルコ（1430?-1497?）が、同時に多くの素晴らしい写本を書いていたことをわれわれは知っている。ある印刷所は「能筆家」ピエトロ・モリノ（1475-1508）の働きに浴することができたが、彼はアラゴン家図書館の「管理人」でもあった。大英博物館の初期刊本目録が指摘するように、フィレンツェにあるリボリの聖ヤコボのドミニコ修道会修道女たちが、彼女たちの弁護士であるピストイアのドメニコ師や懺悔聴聞司祭であるピサのピエロ師に、スカーラ通りの修道院に印刷所を設立してはどうかと提案したが、これはおそらく彼女たちに書の技術があったためだと思われる。

印刷術が登場した最初の半世紀に、ペーター・シェーファーからアントワヌ・ヴェラールにいたる数え切れないほどの写字生が、その新しい「至高の技」で成功をおさめるため、それまでずっと訓練をつんできた写字生としての職業を捨てた。彼らのなかには、ナポリのアルナルドゥス・デ・ブリュッセラ、ブリュージュのコラード・マンション、アウクスブルクのヨハン・シュスラーのように、失望して印刷業をあきらめ、写字生としての彼らのそれまでの仕事を再び始める者もいた。同じアウクスブルクのヨハン・ベムラーの場合も、同様の状況であったと思われる。彼は写字生であったが、のちに印刷業を始め、1477年から1495年まで印刷所で働いた。1508年まではどうも「書物に関わる人」として課税台帳に載り続けたようだが、その後の彼のキャリアについては何もわかっていない。

どのような人々がこの新しい職業で運試しをしたくなったかを知るのは大変困難である。書を生業とするプロの写字生たちは、おそらく若い頃からみずからの技術を磨いてきており、ほかの仕事を経験したり（あるいはもっと若いときに仕事を得たり）する必要がなかった。しかし印刷術が現れた初期においては、印刷家を目指す人は誰でも、儲けていようがいが、今就いている職を捨て去り、冒険的で予測できない未来へ船出しなければならなかった。残念ながら、この印刷家という職業にすべてをかけた人々について、われわれが利用できる個人の記録はほとんどない。エルンスト・フォリエメの『15世紀ドイツにおける印刷家』（ベルリン、1922年）に登場する187人の

印刷家のうちの88人について、われわれは全く情報を持っていない。私が数えたところによると、残りの91人については36人が大学での仕事を持っていた。22人は芸術家であり、そのうち6人は仕立屋であった。15人は貴族階級に属していた。13人は写生字であった。11人は聖職者であり、それとほぼ同数が書籍商（元写本卸売業者2人を含む）であった。

当然のことながら、15世紀後半の印刷家のなかにはほかの仕事をしたことがなく、直接印刷の仕事をするようになった人もいた。フランケンはハンメルブルクのヨハン・フローベンがそうであった。彼はバーゼルの卓越した学者であり印刷家で、のちにエラスムスの作品を出版し、フローベンの屋敷である「ケッセル邸」でエラスムスの名うての庇護者となった。彼は「奉公人」としての人生を、もう1人の主要な印刷家でありパリ大学で学んだヨハン・アーマーバッハの印刷所で始めた。初期の印刷家の経歴を学べば、おどろくほど多彩な背景が明らかになってくる。たとえばドイツにおける初期の印刷家の経歴は、大学長（ライプツィヒとニュルンベルクの印刷家アンドレアス・フリスナー）や修道士（ニュルンベルクに近いヴァック出身のハイナリッヒ・ヴィルツブルク）から、税の取り立て人や理髪師兼外科医（それぞれライプツィヒのコンラート・カッヒェルオーフェンとニュルンベルクのハンス・フォルツ）にいたるまで多岐にわたっている。芸術家もまたこの新しい仕事に取りくんだ。そのなかには、大聖堂の建築家、レゲンスブルクのマテウス・ロリツァーや、臆面もなくみずから「高等裁判官」と評したイタリア人ベルナルドゥス・ケニーヌスが含まれる。ケニーヌスはギベルティを手伝ってフィレンツェの洗礼堂のドアの1つを完成させ、同じ建物にある洗礼者ヨハネの銀の祭壇にほどこされた浮き彫りも製作した。パルマのダミナウス・デ・モイリスこそ多才な人物で、「彩色家であり印刷家」でありながら、陶芸や製本、書にも手を染めた。1477年にはほかの2、3冊の本とともに『典礼書』を出版し、数多くの典礼書の写本も製作した。あいた時間には書物を販売したり、能筆家の手引き書を執筆したりした。

クザーヌスが「これは聖遺物であり芸術だ」と好んで呼んでいたように、確かに印刷術はさまざまなすばらしい人々を惹きつけた。そのなかには、少なくとも1人の女性、アウクスブルク在住のアンナ・リュエグリンという名前の未亡人が含まれている。次に当時の学者がこのような印刷家の仕事についてどのように考えていたのかを探求するのは意味がある。彼らの意見も印

刷に魅了された人々と同様にさまざまであった。彼らはグーテンベルクの発明を神の恩恵、あるいは呪いのいずれかとみなしていた。ときにはその両要素を備えたものとみなすこともあった。彼らのなかで、たとえばゲオルギウス・メルーラはそのいずれであるか決めかねている。印刷を悪いものとして公然と非難の声をあげた人たちのなかに、ボローニャのユマニストであり自身も印刷所の共同経営者であったフランチェスコ・ダル・ポツォがいた。彼はみずから出版したタキトゥスの版の前文で、ヴェネツィアの印刷家たちが「この神の作品」の本文を混合し価値を損なってしまい、そこから何かを理解するのはほとんど不可能になっていると不満を訴えている。フランチェスコ・フィレルフォは1476年2月26日づけで枢機卿マルコ・バルボに手紙を書き、ローマの印刷家たちが彼の著書『教皇権についてのキリストに関して』の一部をひどく改悪したため、理解できないものになってしまったと不平を漏らしている。それから1年と少したって、1477年4月7日づけのベルナルド・ジウスティニアノーへの手紙の中で、フィレルフォは彼の翻訳クセノファヌスの『キュロスの教育』に関連して、ミラノ人印刷家たちのよく似た不出来な仕事ぶりを指摘している。

当然ながら、印刷家たちはこのような批判に対しできる限り反論した。ボローニャのベネディクトゥス・ヘクトリスは、テキストの欠陥の責任は写生字と印刷家の双方に同等にあるとした。その一方で、同じボローニャのプラト・デ・ベネディクトゥスは全責任を否定し、欠陥のすべては「彼の同僚の不注意」のせいだと主張した。ヴェニス親方アルドゥス・マヌティウスは、純正なテキストを提供することの難しさを指摘している。彼は良質のラテン語のテキストを作るのが困難であること、正確なギリシア語のテキスト製作はさらに困難であり、なかでももっとも難しいのが全く誤りのないテキストを作ることであると認めている。キャクストンはさらに謙虚に、「誤りをみつけた読者には訂正することを求め、訂正することで読者は感謝を受けるに値する人物となり、彼らを祝福するよう神に祈ります」と述べている。さきほど触れたフィレンツェの芸術家ベルナルド・チェンニーニは、セルヴィウスによるヴェルギリウスについての注釈に関する彼の版のなかで、早くも次のように自慢している。「おわかりになるように、私の息子ピエトロは細心の注意を払ってテキストを校訂しました。彼が加えたことは、フィレンツェの教養人にとって何も難しいことではありません。」テキストの正確さは、ちょ

うどそれ以前に活躍した写字生がそうしたように、当時多くの奥書のなかで強調され、ときにはわずかに正当化の根拠が示されることもあった。しかし印刷家が写字生に向かいあったときに取る高慢な態度は、新しい技術が機械まかせの劣ったものであり、従って手書きの技よりも低級だという当時の批判に対する防御的な反応だったのかもしれない。印刷術に関するその当時の「贅否両論」の評価について調べてみたい人には、ヒエロニムス・スクアルチアフィーコの大変興味深い文章が手紙の形式で残っている。この手紙は1481年11月23日の日付で、シャンゼリゼからこれより前の7月31日に亡くなったフランチェスコ・フィレルフォによって彼のもとに送られたものである。

立派な市民が印刷業により一財産を築こうとした動機が何であれ、また、その努力の結果についてどのようなことが言われようとも、確かなことが1つある。それはその事業には多額の資金が必要であったということである。ヨハン・フストがゲーテンベルクの印刷業に2000グルデン以上つき込んだと言っていたことが思い起こされるだろうが（たとえその金額が、借り手ゲーテンベルクが異議を唱える余地のない元金1600グルデンだとしても）、この金額は当時としては非常に莫大なものであった。マインツの町の大臣であるコンラート・フメリーの年収は、1444年には130グルデンにすぎなかったが、数年後208グルデンにまで上昇し、この金額で非常に優雅な生活を送っていたことがわかっている。従って、ゲーテンベルクの印刷業にフストが危険をいとわず投入した金額は、少なくとも都会で贅沢な暮らしをする政治家の10年分の給料に匹敵するものであった。帝都アウクスブルクにおいて、1467年当時、課税台帳に記載されていた4510人の市民のうち、課税対象となる2400グルデンの資本を持つものは63人しかいなかった。

ここでしばらくの間、私は本題から離れ、初期の活版印刷にとって非常に重要な問題に関係する課題にふれてみたい。いつの日か事情が許せば、より詳しくこの問題に戻りたいと考えている。

おそらく見当はずれではないと思われるが、もしフストがゲーテンベルクの唯一の「天使」であり、印刷術の発明者であるゲーテンベルクにはこの事業につき込む個人的資産がなかったとして、印刷工場に投資した総額は、フスト自身の見積もりでは2000グルデン以上にもなる。そうするとこの金額は6台の印刷機を設置するには十分の金額であったにちがいない。『42行聖書』の印刷がその6台の印刷機で同時に行われていたことは確かなことであるの

だから。この工場はヨーロッパに設けられたまさに最初の印刷設備で、これらの印刷機は次の数十年の間に同じ意図をもって設置された類似の印刷機よりももっと高価であったと考えられる。同時代のヴィルヘルム・ヴィトヴァーは、アウクスブルクの聖ウルリヒと聖アフラの修道院長に関する説明のなかで、1472年に修道院が印刷工場を建設するのに700グルデンかかったと断言している。その年の公式記事によれば、スイクトゥス・ザウアロホは修道院長メルヒオール・フォン・シュタムハイムの求めに応じて、必要な付属品一切とともに2台の印刷機を165グルデンという金額で提供した。ヨハン・シュスラーが、(1473年3月6日という)日付が残っている最後の本を印刷し終え、しばらくたってから印刷業を引退したとき、彼は中古の印刷機5台と同程度に中古の付属品を同じ修道院に73グルデンという（おそらく非常に安い）金額で売り払っている。

もしわれわれが印刷機2台分に165グルデンという価格をあてるならば、20年前のグーテンベルクには1台が100グルデンを下らなかつたはずであり、そうすると総額が600グルデンほどになる。われわれはすでに、30数冊の本の見積もりにもとづき、羊皮紙の代金が335グルデン、あるいはそれ以上であっただろうと見てきた。従って、全部で35冊の羊皮紙本を作ると想定すると、390グルデン分の子牛皮が必要になる。羊皮紙本の5倍の数の一般的な本、つまり150部の紙装本聖書を製作するのに必要な紙の購入に、少なくとも同じくらいの費用がかかったはずである。実際シュヴェンケは紙の経費を900グルデンと見積もっている。それからすると、印刷機に要する最低必要額として1500グルデンというおおよその見積もりが得られる。結果としてグーテンベルクの手元には100から520グルデンのあいだの未使用の資金が残ったことになる。しかしながら印刷機を稼働させようにも、人的労働力がなければ6台の印刷機は全く役立たないことになる。しかもそれぞれの印刷機を動かすためには少なくとも2人は必要であった。加えて活字の組み上げと解版、必要な校正、また印刷が始まったあとで、本文を挿入したりその他の訂正作業をするため、2台の印刷機に1人、実際上は1台の印刷機に1人の人員を置かなければならなかつた。親方であり、すぐれた技術工であり、またありとあらゆる問題を解決しなければならない立場にあったグーテンベルク自身に加え、彼の従業員名簿には最低で16人、おそらく20人かそれ以上もの人が載っていたにちがいない。聖書を完成させるのに2年もの期間がかかっ

たとも推測されている。グーテンベルクが手元に持っていた資金は、各従業員に年間（もっとも気前よく見積もって）13グルデン、最低の金額を考えれば、年間2.5グルデン以下の賃金を支払うのに、十分であった。参考までに、1482年にアウクスブルクで子牛1頭の肉が1グルデンの収入をもたらしたことに注目してよい。1460年出版の『カトリコン』は1465年に41グルデンであった。一方、聖ウルリヒと聖アフラの印刷所で出版されたヴァンサン・ド・ボーヴェ著『歴史の鑑』は、1474年に20から24グルデンのあいだの価格で売られていた。グーテンベルクが自分の働きにふさわしいと思う給料の取り分、あるいは、地代、石炭、活字、インクや修理費などに要した出費の可能性を全く考慮に入れなくても、このような状況下で、コンラート・フメリー（マインツの要職にある）の給料が高度の技術を持った職人の65倍であったことは記憶に値する。これらはみな信用できるだろうか。あるいは、われわれが受け入れた考えや推測には何か疑わしい点があるだろうか。最後に、羊皮紙と紙だけで1400グルデンかかったというパウル・シュヴェンケの計算にくみするならば、印刷機の設置後、従業員に支払う金は全く残っていなかったことになる。従業員たちは「この神聖な芸術」に献身的に身を捧げたかもしれない。しかしその彼らにしても、丸2年もの間、それほどまでに献身的になれる経済的余裕はなかったはずである。

印刷所の開設には比較的大きな資本投資が必要とされたが、これが理由で出版業に乗り出すのに躊躇うことはなかった。もちろん初期の印刷家は、技術的な職能の持ち主であることに加え、この事業分野における意欲的な起業家でもあった。結局この分野で先駆けとなった人々のうち、成功をおさめたのはほんの少数であった。新しい技術が浸透していったすべての都市において、広まると同時に現れた印刷所同士の激しい競争の結果、印刷業によってかろうじて生活を営むことができた人たちは運が良かった方である。需要と供給の法則（この法則自体を不幸なことだととらえる人もいるが）は、15世紀にも今日と同じように働いていた。ヴェネツィアでは31年間に、150ほどの印刷所が期待のうちに開設された。1469年から1501年までに、平均して1年にほぼ5つの印刷所ができたことになる。ただしこのリストには、相当数の無名の印刷所は含まれていない。印刷家が操業し続けた期間や、最後には取引の中止に追い込まれたときの経済状況に関しわずかに残る情報から判断すると、開設された印刷所のうち、事業で実質的な成功をおさめたのはほん

の一握りであった。確かに、シェーファー家、キンテル家、ズィルバー家（別名フランク家）、マヌツィ家、（大西洋の両岸にある）クロムバーガー家のような一族は、何世代にもわたって首尾よく印刷業を成功させてきた。そしてまた、ギンター・ツァイナー、アントン・コーベルガー、アントワヌ・ヴェラル、シュテファン・プランクなどのように、みずからの事業から莫大な経済的報酬を享受した人たちもいた。すでに見てきたように、ツァイナーは当時アウクスブルクでもっとも裕福な市民の1人であり、最高額の税金を支払った63人のうちの1人であった。1498年、エアハルト・ラートドルトは課税台帳に載っている5050名の名前のうち117番目として現れる。彼は2400フロリン以上の資産を持つ143人のアウクスブルク市民の1人であった。ウィリアム・キャクストンが死んだとき、彼の葬儀にかかった費用は、ウェストminster寺院の境内にあるセント・マーガレット教会の教区民と比べてもずいぶん高かったが、このことはコミュニティにおいて、彼が著しく卓越した人物であったことを示している。キャクストンの財産が平均以上であったことは、ジェラード・クロップが義理の父親であるその印刷家から80ポンド遺贈されたと主張した事実から判断できるであろう。クロップの言葉以外にそのような遺贈の記録がないため、明らかに口頭遺言が用いられたのである。この種の遺言は、チャールズ2世の治世まで法的に有効であった。印刷業はこのように新しい富裕層を形成することができた。それは書写それだけではけっして生み出すことのできなかつた富裕層であった。印刷業がより繁栄していたのは、ハイデルベルクやオックスフォードのような大学都市、あるいは、例としてあげればオルレアン、ナルボンヌ、アイヒシュテット、マイセン、ヘローナ、ムルシアのような司教都市においてよりも、大商業都市（ミラノ、ヴェネツィア、バーゼル、ストラスブルク、そしてロンドン、より正確にはその隣のウェストminster）においてであったと、一般的にはいえるであろう。そうであれば、コーベルガーやラートドルト、キャクストンのような地元民は、少なくともその土地のギルドとうまくやっていくという点においては、「外国人」よりもかなり有利であったということもおそらく真実であろう。

しかしこれらの成功例は例外にすぎない。印刷機という新しい手段を手に入れると、出版可能な本の数は現実には際限がなくなり、そのためほとんど直ちに熾烈な競争が助長されることとなった。これまで常習的に品薄がこぼ

されていた市場に、とつぜん書物が洪水のように押し寄せた。ギュンター・ツァイナーだけでおよそ36000冊を印刷したといわれているが、その当時アウクスブルクの全人口はその数の半分にしか達していなかった。1471年から1473年にかけて、イタリア半島の出版業界を一連の危機が襲った。市場には売れ残った本がだぶついていた。今日の俄景気と不景気の波に非常によく似たこれらの惨事は、今日以上に当時においては、誰にも教訓を与えなかったようにみえる。1500年までに市場はもう一度飽和状態になった。1503年、コーベルガーはバーゼルの同僚であるヨハン・アーマーバッハに、聖職者はいまの時代、本で貧乏になるといつて次のように書き送っている。「本を購入したことで財布が空になった僧侶がいる。それほどお金を使ったので、もはや本など求めはしない。」バーゼルにおける最初期の15人の印刷業者のうち6人も業者が破産した。ギルドの全メンバーの完全な伝記的詳細を手に入れば、おそらくもっと増えることだろう。早晩深刻な経済上の失敗を被った、あるいは最終的に全面的な敗北を認めなければならなかったドイツ人たちの名簿は、印刷業界の栄誉殿堂入りした人々の名簿のように読める。名簿に載っていたのは次の面々である。ヨハン・グーテンベルク、3カ国で不成功におわったヨハン・ノイマイスター、ケルンの最初の印刷業者ウルリヒ・ツェル、ウルムの最初の3人の印刷業者、ヨハン・ツァイナー、コンラート・ディンクムート、リーンハート・ホレ。リユーベックとライプツィヒのブランディス家の少年たち（マタイ、マルコ、ルカといったブランディス家のメンバーに、ヨハネをつけ加えることができれば完璧なのだが）。その一方でハインリッヒ・モリトワーは、確かに富や財産がないままに死んでいった非常に数少ない写字生の1人であったように思える。

熾烈な競争と倒産の恐れといった当時の悲惨な一連の状況が、おそらく多くの印刷家たちにやむをえず「放浪生活」を強いた理由であろうが、その状況は19世紀の移動カメラマンを取り囲んでいた状況と多少似ているところがあった。サン・ジェルマーノ、ヴェルチェリー、チバツソー、ヴェネツィア、トリノ、リヨン各地でつづけて働いたヤコピヌス・スイグス、それぞれ違った時期にボローニャ、プレスキア、ルカ、モデナ、ノツァーノ、シエナ、ウルピノに印刷所を持っていたコロニャのヘンリクス、さきほど触れたばかりのヨハン・ノイマイスターのような人たちが、このタイプの印刷家の特徴をもっている。ヨハン・ベッケンフープの生涯のすばらしい要約を読みたい

のなら、英国書誌学会の学術雑誌『ザ・ライブラリィ』に数年前に書かれたヴィクトール・シヨルデラーの興味深い記述を、私は心からお薦めする。

放浪生活を強いられた印刷家の1つの結果として、15世紀にわずかに数冊の書物を製作しただけで、その後もはや耳にすることがない小さな町の印刷家が生まれたことが挙げられる。ある有名な印刷家がある場所にこつぜんと姿を現し、その地で書物を1冊だけ出版することも、これに関連している。それぞれの書物の奥書はわれわれに完全な真実を語ってくれるのだろうか。あるいは印刷家は購入する可能性のある人々を惹きつけるために、故意に偽りの説明を書物に書き込んだのだろうか。売り上げのために、奥書に掲載されている場所とは異なる所で書物が印刷された可能性はなかったのだろうか。というのも、印刷家は地元自慢が書の売れ行きを促すのではないかという希望を持っていたからである。偶然にもこのことを裏づける確かな証拠があり、私はそれをボローニャの印刷所に関する著作のなかでより詳細に述べたところである。キケロの『友情について』はライブツィヒでメルヒオール・ロターによって印刷され、「ハイデルベルク出版」という単純な奥付が付されているのだが、メルヒオール・ロターがここで仕事をしていたことは知られていない。『初期刊本総目録』の7001番によれば、ロターは現存していないハイデルベルクの初期刊本を再版していたのだが、ライブツィヒ版（おそらく1500年以降に出版）はこの種の説明を完全に受け入れるには年代がかなり遅いのである。ロターがのちにハイデルベルクで販売することを視野に入れて、この本をライブツィヒで印刷した可能性もあると私は考えている。ロザーテのアルベリクス（『総目録』529番）には、出版場所としてミラノとヴェネツィアのそれぞれが示された2つの奥書がついていることが知られている。この版は販売先に応じて分割され、各部がそれぞれの町で売られることになっていたのだろうか。ただし奥書は紛らわしい情報を提供することがしばしばあった。出版者が何らかの理由で購入者を欺こうと思った場合には意図的に盗作や偽造が行われ、印刷家があまりにも忠実に原稿を写した場合には偶然に欺くこととなった。その結果、奥書から納得のいくように事実を得ることが必ずしもできなくなってしまったのである。聖ベルナルの著作であると誤って考えられ、『初期刊本総目録』では4033という番号が付されている『人間の内省についての考察』の版について考えてみよう。奥書ではこの本が1492年にストラスブルクで印刷され、総目録によれば、確かに本文は当

該の版に先行する版からとられている。しかしこの2つの版はどちらもストラズブルクでは印刷されていないのである。出版場所が明記されていない古い版はバーゼルでヨハン・アーマーバッハが印刷し、後の版はベルナルデイス・ベナリウスがヴェネツィアで出版したことが現在ではわかっている。この書物の印刷家は、単純に彼の原本がストラズブルクのものだと思っていたのであろうか。もしそうだとすればそれはなぜなのか。

初期刊本の時期に、輸出を目的とした書物がかなり大量に生産されたという推測にはもっともな証拠がある。数年前私は次のことを指摘した。1473年頃ヨハン・ツァイナーによって、まちがいなくウルムで印刷されたドイツ語によるペトラルカの『忍耐強いグリゼルダ』は、明らかにアウクスブルクで販売するために作られた。その書物はウルムで当時使われていた方言ではなく、アウクスブルクで使われていた方言で印刷されたからである。ヨハン・ツァイナーがそのような仕方でも印刷した書物は、おそらくこの書物だけではなかっただろう。15世紀後半アントン・コーベルガーは、ストラズブルクのアドルフ・ルシュヤバーゼルのヨハン・アーマーバッハに、自分のために書物を作らせ、16世紀になると、バーゼルのアダム・ベトリも使って書物を作らせた。

初期の印刷家たちが売れ筋と見たてた書物のジャンルを確定するべく、私は23の書籍商の広告を分析したことがある。それらはすべてドイツの印刷業者から発行されたものである。おそらくこれらの広告の製作者たちは、こうした書物の広告をすすんで作りだしたことだろう。そうすることが、予想される購買者の興味を引きつけるのに非常に有用であると信じたからである。さらに、これらの広告でリストに挙がっている書物のなかには、そのときから完全に消えてなくなったものもある。そのような書物は土地の言葉で書かれ、たいい評判のよい、通俗的な書物であって、文字通り熱心な読者によって「すり切れるまで読まれ」た。従って、実際にどんな書物が出版されたかについて、現存する書物のみに基づいた数値よりも、この広告リストの方がよい統計上の全体像をわれわれに提供してくれそうである。残念ながら私は、得られた結果が要した努力のわりには報われなかったと告白しなければならない。それらの広告は、全部で176の書物を掲載している。それらのうち、ちょうど100冊(56.8%)がラテン語で、残り(43.2%)がドイツ語で書かれている。宗教書が圧倒的に多く、44冊がラテン語、24冊がドイツ語の書

物である。一方、ドイツ語による15冊のロマンスは、5冊の聖書（3冊がラテン語、2冊がドイツ語）と比較すると、その多さが際立つかもしれない。13冊の科学書は、少なくとも当時は科学的な書物だと考えられていたのだが、聖人の生涯に捧げられた書物（全部で6冊）よりもずいぶん数が多い。しかし、下のリストにあげた数値から何か意味のあることが拾い上げられるとしても、それは明らかに私の目にとまることはなかった。

それらの広告に現れる書物は、次のようにまとめることができる。

聖書	5
聖書のテキストとその注釈	12
大勅書	1
教訓物	10
歴史書	6
法律書	11
古典文学（翻訳つき）	6
中世文学（翻訳つき）	12
典礼書	4
祈祷書・宗教書	68
ロマンス	15
聖人伝	6
科学書	13
説教集	5
旅行書（ドイツ語）	2
合計	<hr/> 176

印刷家の広告と比較すると、ディオボルト・ラウバーが提供可能な写本について作成したリストは、はるかに数が少ない。彼は自分が作成した幾多のラテン語の書物を自慢したといわれているが、その広告リストのなかで、ラテン語で書かれている書物は1冊だけであり、しかもそれには「ラテン語とドイツ語による詩篇」というドイツ語訳が添えられている。ラウバーが書物を提供しようとした読者は、かつて考えられていたような一般大衆ではなく上流階級であったことは明らかである。その書物とは、あらゆる種類の教養、

娯楽、実用の書であり、なかでもとりわけ宗教書が圧倒的に多かったが、そのなかにドイツ人が厳かに「大衆文学」と呼ぶ書物を取り混ぜられていた。

初期の印刷業者たちが出版のために選んだ書物の選択の仕方は、非常に想像力に欠け紋切り型であったように思える。イタリアの印刷業者たちはみな一様に熱心に同じ古典を出版しており、これまで見てきたように、そのうちの多くがやがて債務超過に陥り店を閉じなければならなくなった。裕福ではあるがけっしてドイツ最大の都市ではないアウクスブルクの4人の印刷業者は、15世紀に生みだされた12冊の高地ドイツ語訳聖書のうち7冊を出版していたにもかかわらず、その頃その地で稼動していた23の印刷所のうち、ただの1ヶ所もラテン語訳聖書を印刷しようとはしなかったようだ。逆に、バーゼルの5つの印刷所は17冊のラテン語訳聖書を出版したが、バーゼルにある15の印刷所のどこも、ドイツ語訳聖書はただの1冊も出版しなかった。プレシアのアルベルトの『弁論と沈黙の技術』は30以上の版が1501年以前に現れていたが、イタリアの出版社はどこも彼の著作を危険覚悟で印刷するほど、この北イタリアのモラリストであり法律家（「弁護人」が彼を表すことばである）に関心をもっていなかった。もっとも彼の著作は、次に挙げるさまざまな場所で出版社を見いだすことになった。その場所とは、アングレーム、アントワープ、アウクスブルク、バーゼル、ケルン、デーヴェンテル、インゴルシュタット、ライプツィヒ、ルーヴェン、リヨン、メミンゲン、パリ、ストラスブルク、トゥールーズの各地である。

印刷本は手書き本と比べるといくらか劣ったものであり、また当時においてもそのように考えられていたという印象が、特に印刷に関する経験のない者のあいだに作られてきた。フェデリコ・ダ・モンテフェルトロの蔵書はもっぱら写本だけで構成されており（「印刷本は1冊もない」）、このことは15世紀における印刷本に対する一般の人々の感じ方であったというヴェスパリアーノ・ダ・ピスティッチの所見にも、われわれはくり返し接してきている。これは本当だろうか。断じて否である。もっとも高名な写本収集家のひとりであるハンガリーのマシアス・コルビヌス王はきわめて多数の初期刊本を所有していたが、一般の認めるところでは、それら初期刊本から書き写された多数の写本をも所有していたのである。それらの写本は、ヴェネツィアのヴィンディヌス・デ・スピラの印刷による1471年版のクルティウス・ルフスの『アレキサンダー大王』の初期刊本、スウェインハイムとパナルツによ

りローマで印刷された1470年版のセント・ジェロームのラテン語訳聖書の初期刊本などから転写されていたのである。コルピヌス王も印刷所を利用し、エステルゴムの聖務日課書やほかの典礼書の印刷を命じた。

イタリアの人文主義者たちは印刷業の熱心な庇護者であった。すぐれた人文学者であるグアリーノ・ダ・ヴェローナの息子、バプテスト派のグアリーノは1489年12月5日にフェラーラからピコ・デラ・ミランドラに宛てて、「もし可能なら、カペラの『メルキュールと文献学の結婚』やセネカの『自然研究』の印刷本を買いたい」と書き送っている。そうすると今度は、「蔵書目録の大半が印刷物と表記されていることは、この蔵書が失われてもわれわれをそれほど後悔させはしないだろう」という意味の、ピコの蔵書に対する評価に見られるような、印刷本を軽んじる現代の判断に疑問を投げかけることになる。ピコ自身が選択権をもっており、彼が印刷された版を買うことを選んだのである。確かに彼には印刷本を好んだすばらしい理由があったにちがいない。周知のごとく、フィチーノが彼を「才知ある不世出の人」と呼んだように、ピコは市場に出回っている写本よりも印刷本のほうが正確であると信じていた。そのことに関していえば、今日まで残ることが叶わなかった印刷本のことを悔やんで悔やみきれない。フランチェスコ・フィレルフォの初期刊本に対する関心はすでに述べてきたが、1470年11月17日のヨハネス・アンドレア宛の手紙はまさしくここでとりあげられるべきだろう。その手紙のなかでフランチェスコは、アレリア大聖堂の主教に印刷本の世界で今何が起きているのかと尋ねている。おそらくそのことがフランチェスコの最大の関心事であったと思われるが、印刷家スウィンハイムとパナルツのために編集の仕事を手伝っていた主教は仕事柄、フランチェスコの関心事を満足させる立場にあったのである。エステ家、ゴンザーガ家、メディチ家、ナポリ王フェルディナンド1世といった貴族の面々は、すすんで新しい技術の成果を手に入れようとしていた。ときはまだ15世紀であったが、ヴァチカン図書館でさえ初期刊本を書棚に置くことを認めていたのである。

ドイツでも状況はまったく同様であった。すでに見てきたように、ハルトマン・シェーデルはイタリアで印刷本を購入し、彼の友人で同じ町に住むヴィリバルト・ピルクハイマーも同じことをした。ツェルテス、フッテン、ヴィムフェリンク、ロイヒリンはみな印刷業者の顧客となった。枢機卿ニコラウス・クザーヌスが印刷に興味を持っていたことは当然よく知られてい

る。テーゲルンゼーの修道院は数百単位で初期刊本を購入し、バイエルンの修道院の大部分もこれに倣った。1803年にこれらの修道院施設が世俗管理されるにあたって、初期刊本はバイエルン国立図書館に移された。初期刊本はそこでルートヴィヒ・ハインの重要な『初期刊本書誌』の基礎となるとともに、書籍業者が在庫の不足を補充することができる副本（今でも業者はそうしていると聞いている）をたくさん用意することにもなった。フランスやイギリスでの例も、当然ながら挙げられるだろう。カミング家の庶子、ベアルンのベルナルの1497年の蔵書目録には、63冊の書物が示されているがほとんどすべてが印刷本である。グラムの司教ジョン・シャーウッドは、ローマを訪れる際にはおもに印刷本を購入していた。土地持ちのジェントリーの代表格であるパストン家はあまり書物を所有していなかったが、それでも蔵書には初期刊本が見受けられる。クリストファー・コロンブスの実子、ドン・フェルナンド・コロスが1522年6月にロンドンを訪れたとき、彼は多数の15世紀の書物を喜んで購入した。その大部分は大陸で印刷されていたのだが、販売のためにイギリスに持ち込まれたものだった。一般的にいて、このような本は「世間一般の人」にうけるような類のものではなかった。しかしそれでもなお、印刷本が当時拒絶されていたと言い張ることができるだろうか。それとも印刷本が劣ったものであるという烙印を押されたのは、フェデリコ・ダ・モンテフェルトロのような傭兵から貴族に成り上がった者の「俗物主義」のためだったのだろうか。

ウルビノのマッテオ・バッティフェリはフェラーラで医学を学び、その後ヴェネツィアで開業した。彼は単なる普通の開業医ではなく、「文学に造詣が深く、医学にも通じた者」として興味の範囲ははるかに多岐にわたっていた。バッティフェリは詩人であった。出来がどれほどのものだったかはさておき、ともかくも彼は詩を書いていた。彼は印刷業にも関心を持ち、アルベルトゥス・マグヌスの『物性論』の編集を手がけた。この本はヨハネスとグレゴリウス・デ・グレゴリースによって1488年1月8日（旧暦）に、バッティフェリの父ヤコブスに捧げる作品としてヴェネツィアで出版された。加えて、この善良なる医者は、時間をみつければ自分の書物に装飾をほどこし、『ギリシア詞華集』の初版を転写した羊皮紙写本を彩色するというみごとな仕事をおこなった。この本は現在、ベルリンのプロイセン国立図書館に収蔵されているが、以前も確かにそこに収蔵されていた。しかしバッティフェリ

もやはり、奥書にわずかな変更を加えている。その奥書のなかで、ヴェネツィアの印刷家ラウレンティウス・フランチーシ・デ・アポロが、この本は1494年8月11日にフィレンツェで印刷されたと言明していた。マッテオ医師は「印刷」という語を削除してそれを「写本」に書き換えたのだ。この書物の最初の部分に挿入され彩色がほどこされた特別の1枚には、バッティフェリがギリシア文字で、彼自身がこの書物を書き（彼は「書く」という動詞を選んでいる）、装飾をほどこしたと書かれている。この言葉は、挿入された1枚だけではなく、当然書物全体に及ぶと読み手が受けとるようもくろまれていた。従って15世紀が終わろうとしていた頃でも、自分の所有する豪華本が写本であること、そうでないにしても少なくとも写本らしくみえることを望んでいた人々が、なお存在していたということになる。